

OMC事務局 〒560-0085 豊中市上新田4-16-1-33 合原 一夫 TEL06-6833-9227  
 広報編集局 〒573-1171 枚方市三栗1-18-20 前田 茂夫 TEL072-850-5781  
<http://www.ne.jp/asahi/smaeda/12/>

平成18年4月(2006年) No.484

## OMC創立は1960年7月22日に (昭和35年)

このほど銀行から「大阪ムービーサークル」名で預けている口座について、個人なら生年月日を、その他グループなら創立年月日を届けてほしいとの連絡がありました。その筋のお達しで、取り扱いが厳しくなるようです。個人の生年月日ならすぐ返答できますが、OMCの創立年月日となると、すぐに答えられません。古い歴史と伝統あるクラブとは承知してはいますが、当時の責任者は今は亡く聞きようがありません。

幸い、OMCニュース創刊号の写しがあることを思い出し、探して調べたところ、昭和39年(1964年)7月22日の日付があることが判りました。ニュース発行以前から8ミリフィルム愛好家たちが集まって8ミリ映画を楽しんでいたらしい、という先人たちの話は聞いていましたが、はっきりした物的証拠は、このOMCニュース創刊号しかありません。そこで、公的な創立年月日を「1964年7月22日」として銀行に返事しましたが、その後公開映写会が46回を迎えることに気付き、公開映写会に合わせ、4年早めて創立記念日を「1960年7月22日」、即ち昭和35年としますと、今年で46年目となります。OMCニュースも今月で484号となり、OMCの長い歴史と伝統を感じて感無量なるものを感じます。これから創立は1960年7月にしたいと思います。

当時10人前後だったと思われるメンバーも今や40人を超え、毎月の作品も15本以上、しかもハイビジョンが登場するなど隔世の感があります。先人たちも映像界の変わりように、あの世で驚いていることでしょう。まあ、とにかく今後も元気で楽しく活動していきましょう(合原記)。

### 4月例会のお知らせ

4月例会は第4土曜日22日、午後6時より大阪市立難波市民学習センター(JR難波駅OCATビル4階)にて開催いたします。  
 ハイビジョン作品もDVテープのみで受付します。6月の撮影会についての説明もあります。最近は出品数も増えております。どうぞお早めにお越しください。楽しい例会にどうぞ。

## ■撮影会募集は4月例会で

最終ロケハンが都合により4月15日と遅れていますので、詳細はこのニュース発行時には間に合いません。22日の例会日には募集要項が決まっていると思いますので、参加者人数を知るため、当日参加希望者を募りますので、よろしくお願ひします。

余部鉄橋に寄せて

前田茂夫

今年の OMC 撮影会は余部鉄橋がメインテーマになりました。鉄道ファンが好きな余部鉄橋がビデオクラブの撮影会対象になった、その経緯は筆者が江村世話役をお誘ひして昨秋余部鉄橋へ撮影旅行したことを合原会長と関幹事が聞きおよび、急遽決まったと伺いました。

また鉄道関連にあまり感心が薄い会員さんのために但馬海岸の漁港風景を加えて撮影会のテーマにすることになりました。山陰から北陸にかけては、冬の間はカニ一色のキャンペーンを仕掛けて集客をしています。6月頃はカニ・シーズンも終わっているので、何が水揚げされるのか楽しみです。

余部鉄橋は昭和61年12月28日に折柄の強風を受けて回送中のお座敷列車が転落したという痛ましい事故が起きました。この事故を契機に余部鉄橋の名前は一躍世間に知られることになりました。落下現場には慰霊碑が建ち、今も供花の絶えることはありません。当時はカニ工場があり、そこへ落下したため女性従業員5名と車掌の6名の犠牲者が出ました。この当時の限界風速は25mであったそうですが、ダイヤ優先で無理をして運行したという人災の側面もあったようです。以来運転限界風速を20mとし厳しく守っています。そのため橋梁上の風速計が20mを越すと直ちに運転中止になります。筆者が訪れた1月初めも猛烈な強風が吹き荒れ5~6時間運休になり、日帰りの予定が一泊するはめになりました。

このように冬の季節風が吹くとすぐに運休になることと、老朽化してきたため鉄橋をコンクリート橋に建替える計画が進んでいます。3月初めにに訪問したときは、駅ホームの横とトンネル出口付近の2個所でボーリング調査が始まっていました。今秋

から本格的に工事にかかるとの話もあり、今年が最後の撮影チャンスではなかろうかと思ひます。

観光資源としての余部鉄橋の存在感は相当なものです。カニカニツアーで但馬海岸に行く観光バスは100%ここで休憩し、鉄道に無関心な人も盛んにシャッターを切っています。しかし集客力抜群のこの鉄橋がコンクリート橋に替わったら、観光資源としての価値が損なわれ、地元の民宿にとって痛手であろうと気の毒になります。

”あまるべ”の漢字には餘部と余部とがあります。餘部はJR山陰本線の駅の正式名称です。時刻表でも餘部の文字が使われています。余部はこの地域を表す名称です。従って広義の意味でこの地域を表す場合は「余部」の漢字を使うのが正しいようです。

## 3月例会のレポート

3月例会は25日いつもの例会場で開催されました。季節も良くなったためか、30名の出席者と17本の作品が出て司会や機材担当者も大忙しの盛会でした。今月は4:3の標準サイズの作品が4本のみに対し、ワイド作品が6本、ハイビジョン作品が7本という、完全に逆転してしまった感じで時代の流れを感じました。司会は吉岡氏、書記、合原氏、機材、河合、江村、増池の3氏、受付、宮崎、守口の各氏の担当で会を進行しました。

■出席者：有村、岩井、江藤、江村、岡本、奥、紙本、河合、黒田、合原、進藤、関、玉井、鉄具、西井、西村、秦、華岡、前田、増池、松本、宮崎、森口、森、森田、安居、山本、吉岡、渡辺、坪井(見学)の30氏。

### ■作品上映

#### 1. 神戸空港

安居利次さん

9分00秒

開港1ヶ月後の神戸空港の現状が描かれています。乗降客より見物客が多いのに対して、伊丹の方は飛行機の発着回数が多く活気のある様子など、社会派作品らしく、うまく締めくくっておられます。撮影中の作者の画面は撮影協力者名を入れた方がよいように思ひます。

## 2. 山里の冬景色

吉岡貞夫さん 4分00秒

一昨年、美山町の雪景色を撮られた作品で、かや葺きの白い屋根がしっとりとした感じで郷愁を感じさせてくれます。こういう風景の映像は動かないだけに、何か動きのあるものがほしいとの声がありました。

## 3. 8月28日

江藤洋司さん 5分24秒

興味をそそられる題名で、日付の意味に関心をそそられました。JR九州「さよならSLあそBOY」号の出発式のイベントの記録でかなり丁寧に撮影されています。

この種の作品は後年ふりかえてみて、はて、何年だったっけ、といった年が案外記憶していないもので、むしろ題名に2005年8月28日とした方がよいかも知れません。ラストカットの鉄橋を渡るSLの夕景は印象的でよかったです、少し短すぎて余韻がないのが残念です。

## 4. 北ボルネオ鉄道

山本正夢さん 5分30秒

かつてゴム運搬のために敷設されたローカル色豊かな鉄道の旅が描かれ興味深く拝見しました。イスラム教の女たち、無蓋車に乗った男たちなど現地人だけが乗っており観光客らしい人は見当たりません。素朴な異国での鉄道の旅物語として楽しい作品でした。以上4本で4:3の通常作品は終了し、次はワイドとハイビジョンに移ります。

## 5. 蒲生野 (W)

鉄具嘉夫さん 4分41秒

万葉集を歩く第二集の8という副題がついていました。万葉集に大変ご関心の深い作者が、万葉集に沿って昔をしのびながら散策されます。努力作ですが、一般の方には少し判りづらいのは致し方ないでしょう。しかし万葉集の雰囲気だけは伝わってきました。シネマモードとワイドモードの設定についてアドバイスがありました。

## 6. 北国脇往還 (W)

森口吉正さん 9分00秒

昨10月例会で上映したとき、トップに道の映像を入れたらという助言を受け、一部入れ替えされての再上映となりました。うまくまとめられていて、古戦場の跡がし

みじみとしのばれます。

## 7. 中の島・光のルネサンス (W)

増池 茂さん 8分40秒

昨年クリスマスの夜、華やかな光のイベントの記録。川に浮かぶ船にもネオンの装飾が施され、舞台では若者が歌っています。

ライティングされた公会堂、図書館の外装に照らし出された光と音楽の芸術。うまくまとめられた作品でした。

## 8. 黒石寺蘇民祭 (W)

河合源七郎さん 9分30秒

岩手県水沢市に古くから伝わる裸祭の記録。2月4日といえば寒さが厳しい季節なのに、水ごり場の裸の男達、その男達が神社の階段を裸のまま駆け上がって伝統行事を演出する様は、なかなか迫力があり惹きつけられました。条件の悪い場所で夜間撮影されたご苦労のほどが伺えます。

## 9. 世界遺産都市ケベックシティ (W)

紙本 勝さん 9分00秒

ケベック市そのものが世界遺産だそうで、古い堂々とした建物が並んでいます。その中で生き生きとした人々の生活ぶりが描かれています。海外旅行でこれだけ落ちついてきっちりと撮影されているのはさすが紙本さんです。ですが、ノンナレで説明がないので雰囲気味わうだけで終わってしまいました。後でお聞きしたらナレ入りと間違えて上映してしまった由。残念でした。

## 10. 三島池と共に (W)

進藤信男さん 9分40秒

伊吹山を仰ぎ見る所に昔、水田用に作られたという池があり、当初湧水が出なかったので人身御供してようやく水を湛える池になったという伝説、四季の移り変わりを表す植物、鴨などの渡り鳥の話など盛りだくさんの話が語られています。地球環境への作者の想いもあり、大変な努力作ですが、題名の再考と共に今一度再構成されたら、素晴らしい作品が期待できそうです。

## 11. 梅の季節 (HDV)

有村 博さん 5分27秒

有村さんも遂にハイビジョンへ転向されたとか、という感無量な感じです。率先して新しい分野に取組まれる様に脱帽です。大阪城の梅林にはカメラマンがズラリ並ん

でいます。一般の観光客も一杯です。ハイビジョンのテストを兼ねて撮影された由で、さすがハイビジョンの画面は普通のワイドにくらべ美しい映像です。作者からハイビジョン撮影ではピントがシビアとか水平出しも少し傾くと目立つとか、露出にも気を使うなど注意点の助言がありました。

#### 12. 風雪・余部 (HDV)

前田茂夫さん 8分35秒

厳しい余部の冬景色は壮観です。6月撮影会作品ではこういう迫力のある映像はとても無理でしょう。吹雪の中の撮影では大変苦労されたであろうことが十分に伝わってきました。

#### 13. 晩秋の観心寺 (HDV)

江村一郎さん 5分15秒

江村さんらしくアップの画面と単純なカットつなぎだけで、美しい映像詩をつくり上げています。江村さんもうとうとうハイビジョンに転向されましたが、こういうアップ主体の映像なら4:3でも充分いけると思いましたが、映像のシャープさは一長あるようです。

#### 14. 早春のいぶき (HDV)

奥 宏さん 5分28秒

ハイビジョンでは先輩格になられた奥さん、今回は長居公園で撮影された映像スケッチです。早春のいろんなカット拾われて雰囲気を出しておられます。BGM が一本調子でメリハリが無いのが気になりました。鳥の声だけの所も考えてみて下さい。

#### 15. 日本民族博物館を訪ねて (HDV)

西村光男さん 4分50秒

服部緑地公園にある日本民家の文化財としての特徴をうまく解説されており、短編ながらよくまとまった作品です。ソニーのHC1 で撮られたという室内撮影もまあまああの明るさでよく撮れていました。たゞこのカメラはピント合わせに苦労するという話でした。

#### 16. チェンマイで寺巡り (HDV)

森田光春さん 8分08秒

チェンマイの多数のお寺さんを訪ね歩いて撮影されており、森田さんだから可能だと感心しました。タイのお寺さんはカラフルで手がこんでおり芸術作品のように美しいですね。BGM が一本調子なのが少し気

になります。現録だけのところをもっと活かして音にメリハリをつけると更に良くなると思います。

#### 17. わらべうた (HDV)

関 剛さん 6分30秒

和歌山淡島神社のひな流しを主体に童謡の世界を描こうと特殊技術を駆使して作られています。この分野は作者独自のものでちょっと真似の出来ない技術です。トップとラストが4:3の画面を使っておられますが、ハイビジョンの画像とあまりにも違いすぎるので違和感があります。またラストの方の人形の顔の動くカットは少しやり過ぎの印象を持ちましたが如何でしょう。

以上で上映を終わり例によって居酒屋組と喫茶組とに別れて二次会を楽しみました。

#### 【寄稿】

#### 黒沢監督『用心棒』観賞の手引 上総修一郎

私は黒沢監督が好きである。

彼の監督作品三十の総べてが素晴らしい。殊に作品の制作態度が独特の厳しさと温かさがあり、諷爽としていたと聞く。私には自分に対しても、ひとに対しても曖昧な態度で過ごす場合がある。彼にはその様な弱点がなかったらしいので憧れを抱いている。会う機会がなかったが、生き様が山ほど書物に残っている。歳も同じ筈で、若かったら追っかけでもしたいくらいの大ファンである。私流の黒沢監督論は後に纏めて誌すことにして、表題の観賞の手引きを述べる。

この映画は東宝と提携した黒沢プロダクションの第二作目で壮健そのもの、脂の乗りきった五十一歳の黒沢明が、のびのびと楽しんで撮りましたと言う「超弩級痛快娯楽時代劇」これは宣伝文だが、それまでの黒沢作品中の最大のヒット作になったことは発表された数字が示している。

この作品を演出したときに書いた彼の手記があつて、制作意図と粗筋が理解できるので、そのまま紹介しよう。『僕がかねてから映画の面白さを十二分に出した作品をこしらえてみたいという夢を持っていた。その夢を実現させたのがこれだ。そして作

ろうと思えば作れるものだ。それなのに、どうして日本で誰もやらなかったのか不思議な気がした。

これは二組に分かれて、いがみ合う不愉快なヤクザを双方鉢合わせさせる男の語だが（中略）筋は至って単純だ。ところがこれがヒットした理由として、他の会社では殺陣の魅力だと言っている。これは僕に言わせればとんでもない話で、この作品の魅力はあの用心棒になった男の性格とその性格から発する一種面白い行動にある。チャンバラにしたって斬る必然性が出たから斬ったのでムヤミに刀を振り回したわけではない』

#### 作品データ

☆モノクロ（藪スロー）シネマスコープ

☆110分、3025メートル

☆スーパースペクタ・ステレオ フォニック・サウンド

#### 製作期間

◎1961年（S36年）

◎1月14日 セット（居酒屋）より  
撮影開始

◎4月16日 撮影終了

◎4月17日 音楽ダビング

◎4月18日19日 オールダビング

◎封切 1961年4月25日 公開

◎他に制作企画・スタッフの決定・セット  
制作・ロケハン・シナリオ作成・

etc 準備期間がある。

#### §シナリオについて

シナリオは制作スタッフの一人である菊島隆三と黒沢明の二人。

二人と言っても殆ど黒沢明一人のアイデアであると想像される。その一例として衣装がある。《やくざの鉢巻から、いれずみに至るまで》黒沢明自身のデッサン画にもとづくもの、また主演者の三船浪人の薄汚れた黒紋付袴、この映画で最大の仇役の仲代達矢の白い絹っばい着流し、赤いチェックのスコットランド製のマフラー、時代劇にマフラーはないだろうと思うが黒沢が実現してみせるとナントこれが効果が大きく、粋でやくざっぽい性格をズバリ見せて、二人の対照は白黒映画ならではの鮮やかさ、画面がしまって見えた。他にも監督のアイデアが一杯ある。箇条書きにして見

よう。

#### ◆音について

今まではチャンバラで斬られると「うー、うん」とか「ぎやあ」チャリンチャリンの刀の音ばかりであったが、黒沢監督は効果音係の三縄氏に「人を斬れば、やっぱり特有の音がするだろうな」と相談。肉の塊を叩いたり斬ったり、濡れ雑巾を重ねて斬ったりなど様々の音を作ったそうである。今ではテレビでも映画でもバシッと音の入っていないものはない。こちらが本家だと、これはこの項の記録者の言である。

#### ◆酒蔵の酒があふれるシーンについて

初めは米蔵であったが酒が溢れる方が絵になると酒樽にして中は水にしたが、樽の大きさや水の溢れ具合に工夫を重ねた事は言うまでもない。

フィルム時代に、私も音を作ったことがあった。タイトル《海猿・山猿》で日本猿が海へ飛び込む水の音を土瓶に水を入れて、紐でつるしてプールに落とした。水の量と落とす水の上の高さがミソだった。

#### 閑話休題

再度、宮川一夫氏のパンフォーカスについての談があるので引用する。

『黒沢さんという方は、あまり正面切って、今度の映画の画調はこういう狙いでいこう、なんて、おっしゃる方ではない。久しぶりの仕事でしたけれど全体の調子についての話し合いなんかは全然なかったですね。仕事に入ると話しかけることは殆どなさらない人ですね。気に入らないとダメだとは言われないで、やるだけやらせて、こう見ておられるんです。（中略）「用心棒」では何といたってもパンフォーカスで苦労しました。手前も向うも、どこも全部ピントが合ってなければいけない。絞りに絞ってコントラストの強いガチガチの硬い色調にしました。昼間の表もドピーカンで強烈な影を狙いました。私はそれまであんなことをやったことはありません。でもそれが「用心棒」のハードボイル的な内容に必要なのです。』

居酒屋の窓棧には泣かされました。特に居酒屋の向いにある絹問屋へ八州廻りの役人が来て袖の下をうけとるところ、それを手前の窓棧ごしに浪人（主演者）がにやに

や眺めているところは、どちらも大事な芝居ですからね、ちょっとでも棧にダブってはいけないし、勿論いつも両方にピントが合っていないければなりません。カメラをのぞいてもピントが合ってるかどうかという事に絶えず神経を使っていましたね。

居酒屋と絹問屋をへだてている通りは結構道幅が広がったので A カメラが居酒屋の中から主演者と窓棧ごしのポジションで 100 ミリ、B カメラが殆ど A と同軸で窓外から絹問屋を狙って 270 ミリ、135 ミリを使って撮りました。

ただでさえパンフォーカスの難しい位置関係なのに、そこへ雨まで降って来るわけですから二重三重に苦労しました。雨で煙って向こうが見えにくいところをオールパンフォーカスで移動までしているんですからね。だから画面に人物の関係がつかまっていて面白いんですよ。(中略) 全編吹き荒れている風もまた大変でした。強すぎれば向うが見えない、弱ければ迫力が無い。俳優にまともにかけると目が開けていられない。

最後に浪人が決闘をしに「馬目の宿」へ一人戻って来るところがあります。はじめは吊るされている居酒屋の親爺の足なめで子がバクチをやっていますが、後半、浪人が現れる時にはカメラはクレーンで上がります。ところが、このクレーンと風がなかなか、うまく行かず 8 回も撮りました。大変印象の強いカットでしたからよく覚えてあります。東野さん(居酒屋の親爺)は縛られたままですから、さぞ手が痛かったことでしょう。

今度またビデオで「用心棒」を見直したんですが面白い映画です。ほんまにオモロイです。やっぱり黒沢さんて、すごい人やなと思いましたね。(中略) 映画はやっぱり演出ですよ、演出・演出。(1993年4月23日京都にて談)

チャンバラをはじめ、動きの速さが欲しいときは望遠レンズで撮ると動作が素速く映写されると言う人がいる。

◆シナリオについての私見と雑記を付け加えてこの稿を終わりにしよう

劇場映画にはシナリオによる話の面白さが大切なことは誰もが知るところである。

話の運びがよくてユーモアがあって、なんとなく色気が加われば観る方が喜ぶこと請け合いである。が、名作になるとは限らない。映写・瞬間画面の印象の強さが続いてこそオモロイと、観る方は感じる。

観客は贅沢なものだ。黒沢監督は、そのところを会得していてシーン毎にさまざまな方法や工夫を凝らし続けていたと思う。観客が想像したこともない話や先刻承知の話題でも黒沢演出となると納得が出来る流れになっている。これが黒沢監督シナリオの身上だ。彼が「監督」「演出家」と呼ばれるより「映画作りの職人」と呼ばれたいと常づね言っている意味は、こんなところにあるのかも知れない。

◆「用心棒」のシナリオの話の設定の上手さを列記してみる

1・1 シーン毎、見事に絵となってアピールする。つくる側はシンドイだろうが余裕をもってコントロールされている。観る側は安心して、ついてゆける。

2・話の構成が緻密で、主役の考え方、行動が頭の働きの良い素晴らしい性格に見えて、成り行きに予定と食い違いが、できても、観る側は結末を安心して待ってられる。

3・主役を演じる三船敏郎が美男で男らしい。不精髭でも、むさくるしくない。全員ポロをまとっているが、汚い感じが全編を通じて感じない。

4・全編にユーモアが漂っている。出演者全員と言ってよいほど善玉や悪玉に拘わらず、すっきりとしていて嫌らしさがない。三船の助人役の前任者、藤田進 浪人が大出入りの前日、逃げ出すのを三船がにやにや見逃すシーンを白昼にして堂々と見せる設定は、うまいと手を打った。

5・オール・キャスト主役端役にかかわらず、役柄にぴったりで、この人でないと、この役がつかまらないと思わせるほど充実している。役者も気分が良かったに違いない。書きつづっていると次々と思い浮かぶが、どうであろう? この辺りで観てみたいと、あなた思ってください。

追記 「用心棒」のDVDが私宅にあります。観たい方は連絡を下さい。

この項終り